彼女の復讐

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女の復讐

【Ｎコード】
Ｎ５４５４Ｐ

【作者名】
空

【あらすじ】
彼女の罠にはまってからいつの間にか3年という月日が流れていた。が、いまだにこれが何なのか俺にはわからない。彼女はいったい俺をどうしたいのだろうか。これは、彼女の復讐なのだろうか。

会社の帰りにいつものようにコンビニで、煙草を買って出た。外に出てみると寒さが舞い戻って体を攻撃してきた。

「ほんと、いやんなる寒さだなー」

声に出して言ってみると、周りに白い息が広がって余計気分が下がる。仕方がないので、コートの前をきゅっと合わせ、急いで家に帰ることにした。ここからだと歩いて15分ほどの距離だ。そう思って頭の中で自分のマンションを想像するとまた気分が落ちる。…どうせ、家に帰っても待ってるんだ。無意識に溜息がこぼれた。が、これが現実で、この世界から逃げ出すことはできない。どう足掻いても。

家の前に着くと、15分なんてあっという間だった。寒さが鋭く身を削ったが、このドアの向こう側がもっと恐ろしいということを身体はもう知っている。

ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込み、慎重にまわすとカチャンと音を立ててロックが解除される。無意識に鍵穴から鍵を引っこ抜くと、自分の意思で開ける前に中から勝手に開けられた。

「おかえりなさい、伏見くん」

この甘い声に騙されて、もう3年という月日が流れた。

「…ただいま。よくわかったね、帰ってきたこと」
「ええ。ドアを開ける音が聞こえたから」
動物並みの聴覚が恐ろしい。
「そう。うるさかった？」
細心の注意を払い、そろっと開けたつもりだった。
「全然。でも伏見くんが帰ってくる音はどんなに些細な音も聞き逃さないの、私」
二コリと笑ったかわいい顔に、普通の男なら鼻の下を伸ばすだろう。俺も昔そうだったように。
「そ、そう」
「うん。それより、寒かったでしょ？　早く入って」
彼女はそう言うと俺からカバンを奪い、リビングに向かった。彼女はいかにもここが自分の家よろしくかのような素振りだが、ここは俺が借りているマンションだ。もちろん、彼女が俺の妻というわけでも、ガールフレンドというわけでもない。そんな彼女がなぜここに居ついているかというと、これまた恐ろしい現実から始まったのだ。
それは、三年前の夏ごろだった。場所は忘れもしない。ゼミの研究室の前の廊下だ。
彼女、竹下　絵莉が俺の前にいきなり現れ、「キミが伏見くん？」と声をかけてきた。

彼女はその頃から考えられないくらい美しい顔立ちだった。透き通った肌にぷっくらとした唇、小さな顔に大きな黒目がちの瞳。男のロマンを集結させたような顔だった。そんな美しい彼女を知らない男なんていないと思われた。

「そうですけど？」

だが、彼女は俺よりも一つ上の先輩で、俺との接点は皆無だったため、いきなり声を掛けられて、なにがなんだかわからなかった。

「私の友達をあちこちで味見してるらしいね」

そう言うと美しい顔を歪めた。美しい顔の人が表情を変えるとこんなにも迫力があるんだな、とこのときの俺はまだのんきなことを考えていた。

「えっと、竹下さんですよね？」

彼女の名前が竹下ということは知っているが、いきなり友達のことを言われたって思い出すにも思いだせない。

「ええ。ちなみに友達の名前を列挙していくのなら岡本清見佐藤朱音岩倉芙美岸谷ちず、」

「すみません、名前を列挙されてもわかりません」

息継ぎもろくにせず言い始め、呆気にとられたので止めることを忘れていた。が、果てしなく続くであろう彼女の言葉を、あわてて遮った。

すると彼女は俺の方を見て、またにっこりとほほ笑んだ。
あ、かわいい。

「くそ野郎ね」
「……はい？」

彼女の外見からは一生聞くことができないような単語がいきなり耳にダイブしてきたため、脳がうまく処理できず、間抜けな反応を取ってしまった。

「聞こえなかったかしら？　くそ野郎、と言ったのよ。キミ、あちこちで遊びまわってるらしいじゃない？」
「はぁ」

ため息とも頷きともとれる言葉に彼女は気にも留めず、続けた。

「はっきり言ってキミって女の敵よね？　でもね、私思うの。騙される方も悪いって。だって、身体の関係なんてお互いの合意は一応なりとも取ってるわけでしょ？　状況はどうあれ」

ここで、一応言い訳さしてもらえるのなら、俺は無理矢理そういったことをしたことはない。はっきりいって嫌がる相手を無理矢理ヤってまで女に不自由してないし。

「キミ、顔は無駄にかっこいみたいだし、そういう付き合い方も仕方ないって言えば仕方ないとは思うの」
「…あの、何が言いたいんですか？」

最初に言ったようにここはゼミ研究室の前の廊下での出来事だ。
人は通るし、先生だって好奇の眼でさっきから見ている。その友達とやらの復讐を兼ねているのなら、最後まで聞いてやるのが筋だとは思うが彼女にそういった雰囲気はない。そもそも、それが目的ならその友達の名前を列挙するあたり、その友達にも失礼だと思うし。

「だから、みんなに女の敵だってレッテル貼られているにも関わらず女の子が後を絶たないってことは、それだけキミに魅力があるってことでしょ？」
「まぁ、かなりポジティブに言いかえればそうなると思います」
「でしょ？　だから、私も興味が沸いちゃって」

ちょっと待て。なんだその笑みは。嫌な予感しか脳裏をよぎらない。

「あの、俺ちょっと用事があるんで続きはまた今度…」
「私のこと彼女にしてくれない？」

最初から俺の話なんて聞いていなかった。

「彼女って…」
「あ、違った。キミの場合彼女じゃないよね。うーん。なんて言うか、私もそろそろ周りの反応がうっとうしいし、恋愛ってしたことないから、キミに教えてほしいっていうか」
「人選ミスだと思います。俺には荷が重すぎる。そもそも恋愛なんて教わるものじゃないでしょう」
「いやいや。キミであってるよ。伏見くんでしょ？」
「いや、そういう意味ではなくて、です」
「とにかく、キミは今まで通りにしてくれて構わないから。私が勝手に言いふらしておくだけだから。今日はそのことを伝えに来ただけなの」

「ちょっと待ってください。どういう意味ですか？」
話が終わったからか、彼女はこの場を去ろうとしだしたので、彼女の腕を掴んで引きとめて聞いた。
「彼女はやっぱまずいか。私の片思いって方がリアルかな？」
「いえ、そもそも意味がわかりません。復讐ですか？」
「違うよー。でもキミに拒否権はないと思うよ？」
「どうしてですか」
「それはおいおいわかるよ。それじゃ、これからよろしくね」
彼女はそう言うと俺の手を振りほどいて颯爽と去って行った。
それから、大学中に《大学1の美女、竹下　絵莉が伏見　怜に恋をした！》と知れ渡るのに1週間もかからなかった。

あの時彼女が言った「おいおい」は、いまだに訪れてくれない。これは一種の詐欺だと思う。
それに、大学1の美女である彼女と張り合おうとする勇者は後にも先にも現れていない。

彼女の目的はいまだにわからないままだが、ちゃっかり家にまで居座られ、今では遊ぶ女に不自由している始末だから、やっぱり彼女は俺に復讐しているのだと思う。たぶん。

「伏見君、何突っ立ってるの？早く入りなよ」

3年前から変わらない、甘い声についつい「あ、うん」と答えてしまった。

この復讐が甘いものなのか、毒が盛られているのか、調べる術を俺は知らない。

（後書き）

こ、これは…いや、続く言葉は呑み込もう。
誤字脱字ございましたら、ご報告していただければうれしいです。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5454p/

彼女の復讐

2011年4月11日04時12分発行